

浮世離れの航空郵便

海外へ出かけると暇を見つけては友人や家族に絵葉書を書く。もう半世紀以上も昔の年の瀬に、パーレヴィ国王治世下のイランから友人に宛てて絵葉書に「謹賀新年」と書いて送ったところ、日本国内までハイ・スピードで配達された。年内に受け取った友人から、一番早い年賀状を受け取ったとジョークを交えて喜ばれたことがある。

想定以上に速く郵便物が届けられる国がある一方で、万事スピード化時代の現代にあって随分のんびりと時間をかけて配達される国もあり、各国の郵便事情もさまざまである。つい最近もあまりにもスローモーな航空便に流石に驚き、どうにも現実感が伴わなかった。

その悠長な航空便とは、カリブ海の小島キューバから送った絵葉書である。出国の折ハバナ空港の郵便ポストに投函した3枚の絵葉書が、どこをどう彷徨ったのか、はるばる日本へ届けられたのが、何と3か月以上も経った後だった。正にギネスものである。8月31日に投函して、奇しくも3通とも揃って12月5日に横浜、奈良、福岡各地で受け取られた。日本とは直行便がない国とは言え、あまりにも多くの時間を費やした。だが、不審気に首を傾げていた知人も、受け取ってみると却って良い思い出になると喜んでくれたし、絵葉書を手取る前にすでに帰国した差出人の私に会った友人の如きは、頻りに「まだもらってないぞ」と急かせていたが、受け取った後は、むしろ話のタネになるとはしゃいでいた。

独自路線を歩む社会主義国キューバでは、社会インフラの整備が遅れて今でも郵便事情は決して良いとは言えない。それにしても万事スピード化の現代社会にあって、ほのかに旅情を伝えてくれる異国情緒たっぷりの絵葉書が、色あせたところに届けられる郵便事情は何かならないだろうか。航空便にしてこれほど時間がかかるなら、海路船便なら一体どれくらいの時間がかかるだろうか。一度試してみたいものである。